民 族 衛 生

第 24 卷 昭 和 33 年 11 月 第 5 號

原 著

Kohei MITSUHASHI: Studies on Fingerprints of the
Inhabitants of Nasu-gun, Tochigi Prefecture

栃木県那須郡住民の指紋の研究

千葉大学医学部解剖学教室 (主任 小池敬事教授)

三 橋 公 平

I 緒 言

皮膚隆線、即ち指紋が遺伝的形質であることは人種間におけるこの状態に著しい差異があることにより明かに推定される。本研究の目的はこの遺伝的形質である指紋を用い、日本民族の地方差の闡明の一助たらしめんとするものである。今回、栃木県那須郡住民の指紋を調査研究する機会を得たので、ここにその成績を報告し、併せて、南関東住民及東北地方住民との比較を試みた。尚この郡は栃木県の東北部を占め、北は福島県であり、陸羽街道を以て之に連絡する。

II 研究方法及び研究資料

資料是那須郡において、小学校児童及び中学校生徒から得たものである。しかして被検者の調査は厳重に行い、祖父母以来、三代に亘り本郡に居住し、且本籍を有するものを選び、他郡及他県出身者は除外した。被検者総数は男性 1141 名、女性 1358 名計 2499 名である。

方法はプリント用インクを以て半紙に押捺した像を用いた。分類法は、小池教授の提唱し、「日本人の指紋」の研究型において決定された弓状紋 (B)、蹄状紋 (S)、二重蹄状紋 (ODS)、渦状紋 (OW) の四項目分類に従った。この分類法に就ては小池教授の手によつて近く印刷公表される予定である。すべて出現頻度の比較には $M_1 \sim M_2 / \sqrt{m_1^2 + m_2^2} \geq 3$ を以て確差ありとした。

III 成 績

1. 男 性 (第 1 表)

1) 各 指 計

A. 各指における各型指紋の出現頻度 (第 2 表)

左手拇指においては、S—OW 群、ODS, B の順位を示し、これらの各順位の間には確差が認められるが、S と OW との間には確差が存在しない。右手拇指においては、OW, S, ODS, B の順位を示し、これらの各順位の間

第 1 表

側 別	型 指	B		S		ODS		OW	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
左 側	拇 指	35	3.07±0.51	474	41.54±1.46	171	14.99±1.06	461	40.40±1.45
	示 指	72	6.31±0.72	484	42.42±1.46	68	5.96±0.70	517	45.31±1.47
	中 指	41	3.59±0.54	648	56.79±1.47	64	5.61±0.68	388	34.01±1.40
	環 指	11	0.96±0.29	432	37.86±1.44	53	4.65±0.62	645	56.53±1.47
	小 指	8	0.53±0.21	806	70.64±1.35	42	3.68±0.56	287	25.15±1.28
	五指計	165	2.89±0.22	2844	49.85±0.66	398	6.98±0.34	2298	40.28±0.65
右 側	拇 指	17	1.49±0.36	382	33.48±1.40	106	9.29±0.86	636	55.74±1.47
	示 指	65	5.70±0.69	487	42.68±1.46	69	6.05±0.71	520	45.57±1.47
	中 指	39	3.42±0.54	665	58.28±1.46	39	3.42±0.54	398	34.88±1.45
	環 指	8	0.70±0.25	347	30.41±1.36	11	0.96±0.29	775	67.92±1.38
	小 指	5	0.44±0.20	703	61.61±1.44	10	0.88±0.28	423	37.07±1.43
	五指計	134	2.35±0.20	2584	45.29±0.66	235	4.12±0.26	2752	48.24±0.65
十 指 計		299	2.62±0.15	5428	47.57±0.47	633	5.55±0.21	5050	44.26±0.46

第 2 表

側 別 指別 順位	左 手					右 手				
	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V
1	S OW	OW S	S	OW	S	OW	OW S	S	OW	S
2	ODS	B ODS	OW	S	OW	S	ODS B	OW	S	OW
3	B		ODS B	ODS	ODS	ODS		ODS B	ODS B	ODS B
4				B	B	B				

には確差が存在する。

左手示指においては、OW—S 群、B—ODS 群の順位を示し、OW と S、B と ODS との間には、確差は認められない。右手示指においては OW—S 群、ODS—B 群の順位を示し、OW と S、ODS と B との間には確差が証明されない。

左手中指においては、S、OW、ODS—B 群の順位を示す。右手中指においても同様の順位を示すが、右手中指においては ODS と B とは実数においても差が認められない。

左手環指においては OW、S、ODS、B の順位を示し、これらの各順位の間には確差が存在する。右手環指においては OW、S、ODS—B 群の順位を示し、ODS と B との間には確差が証明されない。

左手小指においては S、OW、ODS、B の順位を示し、これらの各順位の間には確差が証明される。右手小指においては S、OW、ODS—B 群の順位を示し、ODS と B との間には確差は証明されない。

B. 左右両手の同名指における各型指紋の出現頻度の比較、即ち左右差 (第3表)

拇指においては B を除く各紋型の間に確差が存在し、S 及び ODS は左手の方に多く、逆に OW は右手の方に多い。

第 3 表

指別 紋別	I	II	III	IV	V
B	—	—	—	—	—
S	左手>右手	—	—	左手>右手	左手>右手
ODS	左手>右手	—	—	左手>右手	左手>右手
OW	右手>左手	—	—	右手>左手	右手>左手

示指においては何れの紋型においても左右差は証明されない。

中指においても何れの紋型においても左右差は証明されない。

環指においては B を除く各紋型の間に確差が証明され、S 及び ODS は左手の方に多く、逆に OW は右手の方に多い。

小指においても B を除く各紋型の間に確差が証明され、S 及び ODS は左手の方に多く、逆に OW は右手の方に多い。

C. 各型指紋の出現頻度の各指における比較、すなわち指別的差異 (第4表)

a. 左 手

	6.31 ±0.72	3.59 ±0.54	3.07 ±0.51	0.96 ±0.29	0.53 ±0.21
B	示	中	拇	環	小

B は示指、中指—拇指群、環指—小指群の順位を示しこれらの各順位の間には何れも確差が存在するが、中指と拇指の間、又環指と小指の間には確差が存在しない。従つて上述の順位においては指別的差異が証明される。

	70.64 ±1.35	56.79 ±1.47	42.42 ±1.46	41.54 ±1.46	37.86 ±1.44
S	小	中	示	拇	環

S においては小指が第一位、中指が第二位、示指—拇指—環指群が第三位を示す。これらの順位の間には確差が証明されるが示指と拇指及環指との間には確差が証明されない。

	14.99 ±1.06	5.96 ±0.70	5.61 ±0.68	4.65 ±0.62	3.68 ±0.56
ODS	拇	示	中	環	小

ODS においては拇指の第一位が決定されたのみで示指以下には確差は証明されない。

	56.53 ±1.47	45.31 ±1.47	40.40 ±1.45	34.01 ±1.40	25.15 ±1.28
OW	環	示	拇	中	小

OW においては環指が第一位、示指—拇指群が第二位、中指が第四位、小指が第五位を示し、これらの各順位の間には何れも確差が証明される。即ち指別的差異が明かであるが、示指と拇指との間には確差は証明されない。

b. 右 手

	5.70 ±0.69	3.42 ±0.54	1.49 ±0.36	0.70 ±0.25	0.44 ±0.20
B	示	中	拇	環	小

B においては示指—中指群が第一位、中指—拇指群が第二位、拇指—環指—小指群が第三位を示す。即ち示指と中指の間、中指と拇指の間及拇指と環指及小指の間には確差が認められないが示指と拇指の間、中指と環指との間には確差が認められる。

	61.61 ±1.44	58.28 ±1.46	42.68 ±1.46	33.48 ±1.40	30.41 ±1.36
S	小	中	示	拇	環

S においては小指—中指群、示指、拇指—環指群の順位を示す。これらの順位の間には確差が証明されるが小指と中指との間、拇指と環指との間には確差は存在しない。

ODS においては拇指—示指群、示指—中指群、環指—小指群の順位を示す。これらの各

	9.29 ±0.86	6.05 ±0.71	3.42 ±0.54	0.96 ±0.29	0.88 ±0.28
ODS	拇	示	中	環	小

順位の間には確差が証明される。拇指と示指の間、示指と中指の間、環指と小指との間には確差は証明されないが、拇指と中指の間、示指と環指との間には確差が証明される。

	67.92 ±1.38	55.74 ±1.47	45.57 ±1.47	37.07 ±1.43	34.88 ±1.45
OW	環	拇	示	小	中

OW においては環指、拇指、示指、小指—中指の順位を示す。これらの各順位の間には確差が証明されるが、小指と中指の間には確差が証明されない。

第 4 表

側 別 順位 紋別	左 手				右 手			
	B	S	ODS	OW	B	S	ODS	OW
1	II	V	I	IV	II	V	I	IV
1'					III		II	
2	III I	III	II III V	II I	I IV V	II	III	I
3	IV V	II I IV		III	I IV	IV V		II
4				V				V III

2) 五 指 計

指紋の出現には各紋型と各指との間に密接なる関係が存在し、その出現頻度には指別的差違が存在することは各指計の検討によつて明かになったが、五指計においては、各紋型と各指との関係を見出し、左手又は右手において、紋型を中心として、五指総計したものである。しかして左右の側別のみが考慮された数字であつて、それぞれ性格を異にする指の集計であることを注意しなければならない。

A. 各型指紋の出現頻度の順位(第1表)

a. 左手 左手においては S, OW, ODS, B の順位を示し、これらの各順位の間には何れも確差が存在する。

b. 右手 右手においては OW, S, ODS, B の順位を示し、これらの順位の間には何れも確差が証明される。

B. 左右差について(第5表)

ここにおいては B を除くすべての指において確差が存在し、従つて明かなる左右差が証明される。即ち S, ODS は左手の方に多く、これに対して OW は右手の方に多い。B には左右差は証明されない。

第 5 表

紋 型	B	S	ODS	OW
—	—	左手>右手	左手>右手	右手>左手

3) 十指計(第1表)

十指計においては、五指計における、側別すらも無視された数字である。すなわち、指別的差違も、側別的差違をも無視し、全く紋型中心に集計された値であることを考慮し、この数字を用いなければならない。

十指計における各紋型の出現頻度は S, OW, ODS, B の順位を示し、これらの各順位の間には確差が存在する。

2. 女性成績(第6表)

1) 各 指 計

A. 各指における各型指紋の出現頻度(第7表)

左手拇指においては S が第一位、OW が第二位、ODS が第三位、B が第四位の順位を示し、これら各順位の間には確差が存在する。右手拇指においても全く同様に S, OW, ODS, B の順位を示す。

左手示指においては S が第一位、OW が第二位、B—ODS 群が第三位を示す。これらの各順位の間には確差が証明される。右手示

第 6 表 女 性 成 績

側 別	型 指	B		S		ODS		OW	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
左 手	拇 指	70	5.15±0.60	602	44.33±1.35	218	16.05±1.00	468	34.46±1.29
	示 指	111	8.17±0.74	673	49.56±1.36	79	5.82±0.64	495	36.45±1.31
	中 指	77	5.67±0.63	786	57.88±1.34	86	6.33±0.66	409	30.12±1.24
	環 指	27	1.99±0.38	572	42.12±1.34	61	4.49±0.56	698	51.40±1.36
	小 指	29	2.14±0.39	1004	73.93±1.19	53	3.90±0.53	272	20.03±1.09
	五指計	314	4.62±0.25	3637	53.56±0.61	497	7.32±0.32	2342	34.50±0.58
右 手	拇 指	33	2.43±0.42	652	48.01±1.36	187	13.77±0.94	486	35.79±1.30
	示 指	97	7.14±0.70	652	48.01±1.36	84	6.19±0.65	525	38.66±1.32
	中 指	47	3.46±0.50	923	67.97±1.27	56	4.12±0.54	332	24.45±1.17
	環 指	13	0.96±0.26	500	36.82±1.31	24	1.77±0.36	821	60.46±1.33
	小 指	18	1.33±0.31	974	72.72±1.22	18	1.33±0.31	348	25.63±1.18
	五指計	208	3.06±0.21	3701	54.51±0.60	369	5.43±0.27	2513	37.00±0.56
十 指 計		522	3.84±0.16	7338	54.04±0.43	866	6.38±0.21	4854	35.74±0.41

第 7 表

側 別 指別 順位	左 手					右 手				
	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V
1	S	S	S	OW	S	S	S	S	OW	S
2	OW	OW	OW	S	OW	OW	OW	OW	S	OW
3	ODS	B ODS	ODS B	ODS	ODS B	ODS	B ODS	ODS B	ODS B	ODS B
4	B			B		B				

指も同様の順位を示し、やはり B と ODS の間には確差が認められない。

左手中指においては S, OW, ODS—B 群の順位を示しこれら各順位の間には確差が認められる。右手においても同様の順位を示しやはり ODS と B との間には確差が認められない。

左手環指においては OW, S, ODS, B の順位を示しこれらの各順位の間には確差が認められる。左手小指においては OW, S, ODS—B 群の順位を示し、ODS と B との間には確差が証明されない。

左手小指においては S, OW, ODS—B 群の順位を示しこれら各順位の間には確差が証明されるが ODS と B との間には確差が存在しない。右手小指においても全く左手と同様であるが ODS と B との間は実数においても全く等しい。

B. 左右差 (第 8 表)

左右拇指においては B において左手の方が右手より大きく確差が存在するが、他の紋型においては差は認められない。

左右示指の間には差は認められない。

左右の中指においては B と ODS とにお

第 8 表

指別 紋型	I	II	III	IV	V
B	左手>右手	—	—	—	—
S	—	—	右手>左手	—	—
ODS	—	—	—	左手>右手	左手>左手
OW	—	—	左手>右手	右手>左手	右手>左手

いては左右差が認められないが S と OW との間には確差が認められて S においては右手の方が多く OW においては左手の方が多い。

左右の環指においては B と S とにおいては左右差が存在しないが ODS と OW においては左右差が認められ、ODS においては左手の方が多く OW は右手の方に多い。

左右の小指においては B と S とにおいては左右差が存在しないが ODS と OW とにおいては左右差が存在し、ODS は左手の方に OW は右手の方に多い。

C. 指別的差異 (第9表)

	8.17 ±0.74	5.67 ±0.63	5.15 ±0.60	2.14 ±0.39	1.99 ±0.38
B	示	中	拇	小	環

B においては示指—中指群が第1位、中指—拇指群が第2位、小指—環指群が第4位を示している。これらの中示指と中指との間

第 9 表

側 別 紋型 順位	左 手				右 手			
	B	S	ODS	OW	B	S	ODS	OW
1	II	V	I	IV	II	V	I	IV
1'	III			II				
2	I	III	III IV II V	I	III	I	II	II
2'				III	I	IV	IV	I
3	V	II			IV	IV	V	V
3'	IV	I						
4		IV		V				

a. 左 手

には差が認められず何れが第一位であるか、又中指と拇指との間にも確差が認められず何れが第二位であるか判明しないが示指と拇指との間には確差が認められ明かに拇指は示指より低い。従つて第二位又第三位に在つては決して第一位となることはない。小指は拇指との間に確差

が認められ、指指—環指群が第四位を占める。

	73.93 ±1.19	57.88 ±1.34	49.56 ±1.36	44.33 ±1.35	42.12 ±1.34
S	小	中	示	拇	環

S においては小指が第一位、中指が第二位であつて示指—拇指—環指群が之に続きこれらの各順位の間には確差が証明される。示指と環指との間には確差が証明され、示指と拇指の何れかが第三位、拇指と環指の何れかが第四位を示すことになる。

	16.05 ±1.00	6.33 ±0.66	5.82 ±0.64	4.49 ±0.56	3.90 ±0.53
ODS	拇	中	示	環	小

ODS においては拇指の第一位のみ決定し中指—示指—環指—小指には確差が認められない。

	51.40 ±1.36	36.45 ±1.31	34.46 ±1.29	30.12 ±1.24	20.03 ±1.09
OW	環	示	拇	中	小

OW において環指と拇指の間、示指と中指の間、中指と小指の間には確差は認められるが環指と示指の間、示指と拇指の間、拇指と中指の間には確差が認められない。従つて環指か示指の何れかが第一位、示指又は拇指の何れかが第二位、拇指又は中指の何れかが第三位、小指が第五位を示すこととなる。

b. 右 手

B においては示指の第一位のみが確定し、中指又は拇指の何れかが第二位、拇指—小指

	7.14 ±0.70	3.46 ±0.50	2.43 ±0.42	1.33 ±0.31	0.96 ±0.26
B	示	中	拇	小	環

一環指群の三型の間には確差が証明されない。

	71.72 ±1.22	67.97 ±1.27	48.01 ±1.36	48.01 ±1.36	36.82 ±1.31
S	小	中	拇	示	環

S においては小指—中指群が第一位、拇指—示指群が第三位、環指が第五位を示す。これら各紋型の間には確差が証明されるが、小指と中指との間、拇指と示指の間には確差が存在しない。

	13.77 ±0.94	6.19 ±0.65	4.12 ±0.54	1.77 ±0.36	1.33 ±0.31
ODS	拇	示	中	環	小

拇指が第一位、示指—中指群が第二位、環指—小指群が第四位の順位を示し、これらの各順位の間には確差が証明される。

	60.46 ±1.33	38.66 ±1.32	35.79 ±1.30	25.63 ±1.18	24.45 ±1.17
OW	環	示	拇	小	中

OW においては環指が第一位、示指—拇指群が第二位、小指—中指群が第四位を示し、これらの各順位の間には確差が証明される。

2) 五指計 (第 6 表)

A. 各紋型の出現頻度の順位

a. 左手 左手においては S, OW, ODS, B

の順位を示し、これら各順位の間には何れも確差が証明される。

b. 右手 右手においては左手におけると全く同様に S, OW, ODS, B の順位を示す。

B. 左右差 (第 10 表)

左右両手において S_L を除く他の紋型において左右差を以つて認められ B, ODS は左手の方に多く、これに対して OW は右手の方に多い。

第 10 表

紋 型	B	S	ODS	OW
	左手>右手	—	左手>右手	右手>左手

3) 十指計 (第 6 表)

十指計における各紋型の出現頻度は S, OW, ODS, B の順位を示し、これらの各順位の間には何れも確差が証明される。

3. 男女の比較

1) 各 指 計

男女両性における両側の同名指における各紋型の出現頻度を比較すれば第 11 表の通りである。

a. 左 手

中指及環指においては、いづれの紋型においても、性別が認められない。拇指においては B 及 OW において性別が認められる。即ち B においては女性の方が多く OW においては男性の方が多く明かなる性別を示している。示指においては、S 及 OW において性

第 11 表

側 別 指別 紋型	左 手					右 手				
	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V
B	女>男	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S	—	女>男	—	—	—	女>男	—	女>男	女>男	女>男
ODS	—	—	—	—	—	女>男	—	—	—	—
OW	男>女	男>女	—	—	男>女	男>女	男>女	男>女	男>女	男>女

別が存在し、S においては、女性の方が多く出現し、逆に OW においては男性の方が多く、小指においては OW において性別が存在し、男性の方に多く出現する。

b. 右 手

拇指においては、S, ODS 及び OW の三型に性別が証明される。即ち S 及び ODS は女性の方に多く、OW は男性の方に多い。示指においては、OW において性別が存在し、男性の方が多く、中指においては S 及び OW の兩型に性別が証明される。即ち S は女性の方に多く、OW は男性の方に多い。環指及小指においては、中指と同様であつて、S 及び OW において性別が認められる。即ち S は女性の方に多く、OW は男性の方に多い。

要するに男女両性の右手を比較するとき、右手の場合と大いに相違し、多くの紋型において性別が証明されることは注目すべき所見である。即ち、性別は左手においては著しくないが、右手においては、著しい。又 S においては必ず女性が多く、OW においては必ず男性の方に多いことは、これらの紋型における性との結びつきの固いことを示している。

2) 五指計 (第 12 表)

a. 左手においては ODS を除く B, S 及び OW においては性別が存在し、B 及び S は女性の方に多く、OW は男性の方に多い。

b. 右手においては B を除く、S, ODS 及び OW において、性別が存在し、S 及び ODS は女性の方に多く、OW は男性の方に多い。

第 12 表

側 別	左 手			
	B	S	ODS	OW
	女>男	女>男	—	男>女
側 別	右 手			
	B	S	ODS	OW
	—	女>男	女>男	男>女

3) 十 指 計

B 及び S の二型は女性に多く、OW は男

性に多い。ODS においては男女間に確差が認められない。

4 全指計 (第 13 表)

男女両性の十指計を総計して、全指計とする。十指計においては指別、側別が無視されるが尚性別が考えられている。全指計においてはこの性別も無視された数字である。即ち、全指計においては、男女両性を問わず、左右両手を問わず、又個々の指を問わず総て各紋型を中心としてその出現頻度を総計したものである。従つて、その成績はあくまでも抽象的なものであることを考えて、これを活用しなければならない。全指計の各紋型の出現頻度は S, OW, ODS 及び B の順位を示し、これらの各順位の間には何れも確差が存在する。

第 13 表

紋 型	出 現 頻 度	順 位
B	821 3.29±0.11	4
S	12766 51.08±0.32	1
ODS	1499 6.00±0.15	3
OW	9904 39.63±0.31	2

IV 総括及び比較

1. 総 括

1) 男 性

(1) 各型指紋の出現頻度の順位をみるに第 2 表の如くであつて、各紋型の出現頻度の順位は次の式に集約される。

i) S, OW, ODS, B の順位のもの

左手小指

ii) S, OW, ODS—B 群の順位のもの

左手中指, 右手中指, 小指

iii) OW, S, ODS, B の順位のもの

左手環指, 右手拇指

iv) OW, S, ODS—B 群の順位のもの

右手環指

v) S—OW 群又は OW—S 群が第一位を占めるもの

左手拇指, 示指, 右手示指

(2) 左右差をみるに 示指及び中指を除き他の指においては確差を以つて S, ODS は右手の方に, OW は左手の方に多く出現する。

(3) 指別的差異をみるに, 左手においては B は示指, 中指—拇指群, 環指—小指群の順位, S は小指, 中指, 示指—拇指—環指群, ODS は拇指が第 1 位のみ決定される。OW は環指, 示指—拇指群, 中指, 小指の順位である。

右手においては B は示指—中指群, 中指—拇指群, 拇指—環指—小指群, S は小指—中指群, 示指, 拇指—環指群, ODS は拇指—示指群, 示指—中指群, 環指—小指群, OW は環指, 拇指, 示指, 小指—中指群の順である。

(4) 五指計においては左手は S, OW, ODS 及び B の順位, 右手においては OW, S, ODS 及び B の順位であり, 左右の比較においては S 及び ODS は左手の方に多く, OW は右手の方に多い。B においては左右差が認められない。

(5) 十指計においては S, OW, ODS 及び B の順位である。

2) 女 性

(1) 各型指紋の出現頻度の順位をみるに第 7 表の如くであつて, 各紋型の出現頻度は次の式に集約される。

i) S, OW, ODS, B の順位のもの

左手拇指, 右手拇指

ii) S, OW, ODS—B 群の順位のもの

左手示指, 中指, 小指, 右手示指, 中指, 小指

iii) OW, S, ODS, B の順位のもの

左手環指

iv) OW, S, ODS—B 群の順位のもの

右手環指

(2) 左右差をみるに拇指においては B が左手の方に多く中指においては S が右手の方に, OW が左手の方に多い。環指においては ODS 左手の方に多く, OW は右手の方に多

い。小指においては ODS は左手の方に OW は右手の方に多い。

(3) 指別的差異をみるに, 左手においては B は示指—中指—拇指群, 小指—環指群の順位, S は小指, 中指, 示指—拇指—環指群の順位, ODS においては拇指の第一位のみが決定される。OW においては小指の第五位のみが決定される。

右手においては B は示指の第一位のみが決定, S においては小指—中指群, 拇指—示指群, 環指の順位, ODS においては拇指, 示指—中指群, 環指—小指群の順位, OW においては環指, 示指—拇指群, 小指—中指群の順位である。

(4) 五指計においては左右両手共 S, OW, ODS, B の順位である。次に左右差においては, B と ODS とは左手の方に多く, 逆に OW は右手の方に多く出現する。

(5) 十指計においては S, OW, ODS, B の順位である。

3) 男女の比較

(1) 男性に多く出現し性別の認められるものは, 左手拇指, 示指及び小指, 右手拇指, 示指, 中指, 環指及び小指の以上八本の指における OW, 女性に多く出現するものは, 左手拇指の B, 左手示指, 右手拇指, 中指, 環指及び小指の以上五本の指における S, 右手拇指の ODS などである。

(2) 五指計においては, 左手の B 及び S, 右手の S 及び ODS においては女性に多く出現し, 左右の OW においては男性に多く出現する。

4) 全 指 計

S, OW, ODS, B の順位である。

2. 比 較

ここにおいては志村の東北地方住民及び三橋の埼玉県児玉郡, 千葉県市原郡住民の成績の五指計においてのみ比較したい。但し, 女性においては, 児玉郡との比較は除く。

尚第 15, 16 表において

第 14 表

側別	地方 紋型	那 須 郡	児 玉 郡	市 原 郡	青 森 県	秋 田 県
左 手	B	2.89±0.22	1.90±0.12	1.83±0.18	3.96±0.15	3.11±0.12
	S	49.85±0.66	51.20±0.45	53.27±0.66	60.05±0.37	56.67±0.35
	ODS	6.98±0.34	6.97±0.23	5.79±0.31	9.29±0.22	10.45±0.22
	OW	40.28±0.65	39.93±0.33	39.11±0.64	26.70±0.33	29.77±0.32
右 手	B	2.35±0.20	1.49±0.11	1.50±0.16	3.52±0.14	2.76±0.12
	S	45.29±0.66	47.32±0.45	47.53±0.66	56.79±0.37	52.06±0.35
	ODS	4.12±0.26	3.69±0.17	2.66±0.21	5.98±0.18	6.71±0.18
	OW	48.24±0.65	47.50±0.45	48.31±0.66	33.71±0.36	38.48±0.34

第 15 表

側 別	左 手				右 手			
	B	S	ODS	OW	B	S	ODS	OW
児玉郡	◎	△	—	○	◎	△	○	○
市原郡	◎	×	○	○	◎	△	◎	△
青森県	×	×	×	◎	×	×	×	◎
秋田県	△	×	×	◎	△	×	×	◎

◎ は那須郡が大で確差の認められるもの
○ は那須郡が大で確差の認められないもの
× は那須郡が小で確差の認められるもの
△ は那須郡が小で確差の認められないものを表わしている。

1) 男性 (第 14, 15 表)

(1) 左 手

B においては児玉郡及び市原郡より多く確差が認められる対し、青森県より少く確差が

存在する。秋田県との間には確差は証明されない。

S においては児玉郡との間には確差は証明されないが秋田、青森両県及び市原郡より少い。ODS においては児玉、市原両郡の間には確差は認められないが、秋田、青森県との間には確差が認められて、那須郡が少い。

OW においては児玉、市原両郡との間には確差が存在しないが、青森、秋田両県より確差を以つて多い。

(2) 右 手

B においては左手におけると同様に、児玉及び市原郡より多いが、青森県より少く、これらの間には確差が存在するが秋田県との間には確差は証明されない。

S においては児玉、市原両郡との間には確差が証明されないが、青森、秋田両県より少く確差が証明される。

第 16 表

側別	地方 紋型	那 須 郡	市 原 郡	青 森 県	秋 田 県
左 手	B	4.62±0.25	3.08±0.24	4.73±0.16	4.50±0.15
	S	53.56±0.61	53.54±0.71	61.48±0.37	58.24±0.35
	ODS	7.32±0.32	3.74±0.27	8.45±0.21	8.50±0.20
	OW	34.50±0.58	39.64±0.68	25.34±0.33	28.77±0.32
右 手	B	3.06±0.21	2.10±0.20	3.52±0.14	2.76±0.12
	S	54.51±0.60	54.54±0.70	56.79±0.37	52.06±0.35
	ODS	5.43±0.27	2.24±0.21	5.98±0.18	6.71±0.18
	OW	37.00±0.59	41.12±0.70	33.71±0.36	38.48±0.34

第 17 表

側 別 紋 型	左 手				右 手			
	B	S	ODS	OW	B	S	ODS	OW
市原郡	◎	—	◎	×	◎	—	◎	×
青森県	△	×	×	◎	△	×	△	◎
秋田県	○	×	×	◎	○	◎	×	△

ODS においては 児玉郡を除き、他の三地方と確差が存在し、市原郡より多く、青森、秋田両県より少い。

OW においては児玉郡及び市原郡との間に確差は認められないが、青森、秋田両県との間には確差が存在し、多い。

2) 女 性 (第 16.17 表)

(1) 左 手

B においては市原郡より多く確差が認められるが、青森、秋田両県とは確差が認められない。

S においては、青森、秋田両県より少く、確差が存在するが、市原郡とは差がない。

ODS においては市原郡より多く、秋田、青森両県より少い、これらとの間には夫々確差が存在する。

OW においては市原郡より少く、秋田、青森両県より多い。これらとの間には、いづれも確差が証明される。

(2) 右 手

B においては市原郡より多く、確差が認められる。青森、秋田両県との間には確差は認められない。

S においては青森県より少く、秋田県より多い。これらとの間には確差は証明されるが、市原郡との間には確差がない。

ODS においては市原郡より多く、秋田県より少く、これらとの間には確差が存在するが、青森県との間には確差は存在しない。

OW においては市原郡より少く、青森県より多く、これらとの間に確差は存在するが、秋田県との間には確差は証明されない。

V 結 論

那須郡住民男性 1141 名、女性 1358 名の指紋を小池式分類に従い調査の結果次の結論を得た。

1. 各指における各型指紋の出現頻度は S, OW の順位を示すものは男性においては、右

手の中指及び小指、左手の中指及び小指、女性においては左右の環指を除くすべての指においてであり、OW, S の順位を示すものは男女を通じ左右の環指である。

2. 各指計における各型指紋の指別的差異は男女両性、左右両手と通じ殆ど同様であつて（僅かの例外が認められるが）B は示指において、S は小指又は中指において、ODS は拇指において、OW は環指において最も多く出現する。

3. 各指計における左右差をみるに、左右差のあるものにおいては B, S, ODS は左手の方に多く、OW は右手に多く出現するが、唯女性の中指においては S は右手の方に、OW は左手の方に多く出現する。

4. 各指計における性差は、その性差のあるものにおいては B, S, ODS は女性に多く、OW は男性に多い。

5. 五指計における性差も、性差の認められるものにおいては B, S, ODS は女性に多く、OW は男性に多い。

6. 南関東地方住民と東北地方住民と五指計において比較するに、那須郡住民の成績は之等両地方の中間の値を示している。即ち、男女を通じて B は南関東より多く東北より少く、ODS は南関東より多く東北より少い。OW は男性においては東北より多いが南関東とは確差がないが女性においては東北より多く、南関東より少い。S は地方差はあまり認められない。

この研究は小池教授に対する文部省科学研究費によつたことを附記する。

主 要 文 献

- 1) 小池敬事：指紋の形態学的研究及びその新分類法について，解剖誌，21. 12. 1943.
- 2) 小池敬事：指紋の新分類法について，千葉医学会誌，21. 10. 1943.
- 3) 小池敬事，佐藤英一郎，三橋公平：指紋に対する対する対照紋の關係について，解剖誌，28. 1.
- 4) 志村 巖：東北地方住民の指紋に関する研究，民族衛生，17. 2. 1950.
- 5) 三橋公平：千葉県市原郡住民（男子）の指紋の研究，千葉医学会誌，34. 3. 1958.
- 6) 三橋公平：埼玉県児玉郡住民の指紋の研究，千葉医学会誌，34. 3. 1958.
- 7) 三橋公平：千葉県市原郡住民女子の指紋の研究，千葉医学会誌，34. 2. 1958.

Studies on Fingerprints of the Inhabitants of Nasu-gun,
Tochigi Prefecture

By

Kohei MITSUHASHI

By using Koike's method of classification, studies were made on the fingerprints of the inhabitants, 1,141 males and 1,358 females, of Nasu-gun, Tochigi Prefecture. The results are summarized as follows:

(1) The fingers in which the types S and OW showed the highest and second highest incidences, respectively, were the middle and small fingers of the right hand and the middle and small fingers of the left hand in males, and all the fingers other than the ring fingers of either hands in females. The fingers in which there were the highest and second highest incidences of OW and S respectively, were the ring fingers of either hands both in males and females.

(2) Incidences of all the types of fingerprints in each finger were almost the same in males and females, and in the right hand as in the left, with slight exceptions. The type B occurred most often in the index finger, the type S in the small or middle finger, the type ODS in the thumb and type OW in the 4th finger.

(3) In fingers in which there were differences in the incidence of the type of fingerprint between the right and left hands, the incidences of the types B, S, and ODS were higher in the left hand than in the right, while the type OW occurred in greater number in the right hand than in the left. In the middle finger in females, however, the incidence of the type S was higher in the right hand than in the left, and the incidence of the type OW was higher in the left hand than in the right.

(4) When the incidences of all the types of finger prints in each finger were examined, there were some fingers which showed differences in incidence of the type of fingerprint due to sex. In these fingers the incidences of the types B, S and ODS were higher in females, while the incidence of the type OW was higher in males.

(5) When the incidences of all the types of fingerprints in the five fingers of a hand were examined, there were some hands which showed differences in the incidence of the type of fingerprint between males and females. In these hands the incidences of the types B, S and ODS were higher in females, and the incidence of the type OW was higher in males.

(6) In the incidence of the type of fingerprint in each hand, the inhabitants of Nasu-gun were in the intermediate position between the inhabitants of South Kanto and Tohoku Districts; in both males and females the incidence of the type B was higher in Nasu-gun than in South Kanto District, and lower in Nasu-gun than in Tohoku District, in males the incidence of the type OW was higher in Nasu-gun than in Tohoku District, though there was no significant difference in the incidence of this type between

Nasu-gun and South Kanto District, while in females the incidence of this type was higher in Nasu-gun than in Tohoku-District, and lower in Nasu-gun than in South Kanto District, and there was not much difference between these districts in the incidence of the type S.

(From Department of Anatomy, School of Medicine, Chiba University, Chiba)

Studies of Marriage and Birth in an Orange-raising Village
Part I. A Field Survey of Marriage in Nishiura-mura, Tagata-gun,
Shizuoka Prefecture

By
Kanichi IWAI

This village is by the beech, and is one of the largest orange-raising villages of central Japan. It was studied carefully on the spot. The conclusions are as follows:

1. There are more females than males among 1090 married people (including the divorced and those who lost their Partners).
2. Excepting the period of this lost war, the marriage situation showed a comparatively constant condition.
3. The marriage-age was quite early during the Meiji period, but it is becoming later according to the passing of years.
4. As to the study of the separation, among the dead, more husbands died than wives.
5. The marriage in villages has as one of its purposes the increase of labor power. And those who were divorced marry again the majority are husbands marrying again & women marrying for the first time.

*(From Institute for medical research of Rural Welfare, Faculty of Medicine,
Tokoyo Medical and Dental University, Tokoyo)*